

高等部の実践

社会自立をめざした作業学習の指導は どのように進めたらよいか

—— 農耕・園芸の指導を通して ——

養護学校の義務制実施がスタートした昭和54年4月、本校高等部は新設され、以後年次進行により、今年度完成した。今春は第一回目の卒業生が社会へ出ていくわけである。

高等部のこの3か年の歩みは、模索の期間であったと思う。その間、特に努力してきたことは、作業学習を充実することであった。社会への巣立ちを目前にした最終学部として、まず作業学習を整備・充実させることが自立への近道と考えたからである。そこで我々は、生徒個々の実態に即して、自立に必要な知識・技能・態度を育成するため、作業種目・作業内容・指導法・グループ編成等、種々の検討を重ねてきた。その結果、現在では、印刷・木工・陶芸・被服・農耕園芸の5コースを実施している。これらは、作業そのものが比較的単純であり、また危険度も少ないものである。それとともに、同一規格のものを製作しなければならないという必要上、そこには自ずと技能の向上や厳しい態度づくりが要請されるわけであり、精神薄弱児の作業学習として、ふさわしい素材といえよう。

次に、本校の研究テーマと高等部の取り組みの概略を述べてみたい。研究経過の概要でも説明されているとおり、表現化に視点をあてるとは、表現力を養い、表現方法を身につけていくことにより、生活の中で、「生きて働く力」を育てることである。高等部は、小・中学部を通して獲得してきた表現力や表現方法が、間近に迫った実社会で「生きて働く力」として通用するよう定着させる段階といえよう。我々はその場——自己表現力がいかんなく発揮され、練られ、さらに「生きて働く力」として定着される場を、作業学習に求めたわけである。したがって高等部では、作業学習を通して、職業化と表現化の統合化された授業実践を積み上げ、さらに将来の社会自立にむけて、実社会との関連を深めていくことによって、表現化をめざしているといえよう。

さて本年度は、「農耕・園芸の作業学習を通して社会自立にどう迫るか」をテーマに、研究と取り組んだ。農耕・園芸の、作物を育て、収穫し、選別・計量して販売するという一連の学習過程は、言語（ことば）行動（からだ）記号・図式（かく）といった表現化の学習行動のすべてにかかわるものであり、表現化そのものといっても過言ではない。農耕・園芸の作業を、実社会で「生きて働く力」を生みだすための学習の場とするために、どのような学習場面を設定しどのように指導したか、また、分野の学習内容をどのようにかかわらせたか、その結果、生徒がどのように動作・行動・言語・作品等を通して変容していったか。以下、その実践について述べる。

1 農耕・園芸における取り組み

(1) 作業学習（農耕・園芸）の基本的な考え方

人間の基本的な労働形態というのは、自然そのものを利用し、更に人工的な手を加えることによって商品化していく過程であるといえよう。農耕・園芸はその典型的なものであり、労働のベースといえるものである。作物を植え育て商品化していくことは、素朴だが基本的な生活方法を身につけることができるし、またそこには働く喜びがある。農園作業は命あるものを育てる側面が何にも増して大切なことであり、そこからくる作物へのやさしい心情と、それを育てる労働の厳しさは必然的に体得されるものであり、また当然体得させるべき基本的態度である。体全体を使い、汗と土にまみれて行う作業は、人間の成長発達に必須なものを多く含んでいるからである。本校の生徒にとって、農園作業のもつ意義をまとめてみると次の点が挙げられる。

- ① 知育偏重の学習ではなく、将来にわたり生きて働くことができるための身体を中心とした基本的な技能や勤労態度を育成できること。
- ② 土を相手とすることで、その子どもの全人格が陶冶されること。
- ③ 主に戸外で暑さ寒さに関係なく作業するので、とかく過保護になりがちな傾向に対して、働くことの厳しさが体験できること。
- ④ 理論や観念ではなく、目の前に具体物があり手に取って見たりさわったりできること。
- ⑤ 生き物に対するいつくしみやさしさなど豊かな心情が培われること。
- ⑥ 細かい、きちんと規格にあったものをしなければならないといった作業ではなく、少々ミスでもその後の努力で十分にカバーできる作業であること。

作業学習としての農耕・園芸も、本校が継続して研究している「表現化」に視点を当て、それに則った学習の場たるべく模索してきたことは当然である。本校の選んだ各作業コースは、いずれも、分野としての自立化・表現化・社会化・職業化が総合的に学習され、深められる場として豊かな学習内容をもつものである。このことを農耕・園芸に例をとり、段階別教育内容表の各分野との関連図および各教科・領域との関連図に示している。（P.86参照）

そこで、本年度特に努力したことは、分野としての表現化・社会化・職業化の学習内容が、農耕・園芸の学習を通して更に深められ、実際に生きて使える場となるよう、工夫を重ねてきた点にあると言える。つまり、日々の生活の中で「生きて働く力」を育て、将来の社会自立への道を開くこと、つまり「めざす表現化」を目標として、指導の場の改善に努めてきたのである。そのために、農耕・園芸コースでは、次のような場を設定した。

- ① 社会化を深めるために
ア 農産物の流通の学習を通して（以下「の学習を通して」を省略する）

イ 宿泊農園作業による市場への出荷……別項参照

② 表現化を深めるために

ア 校内販売学習 イ 校外販売学習 ウ 観察日記 エ 農園日誌

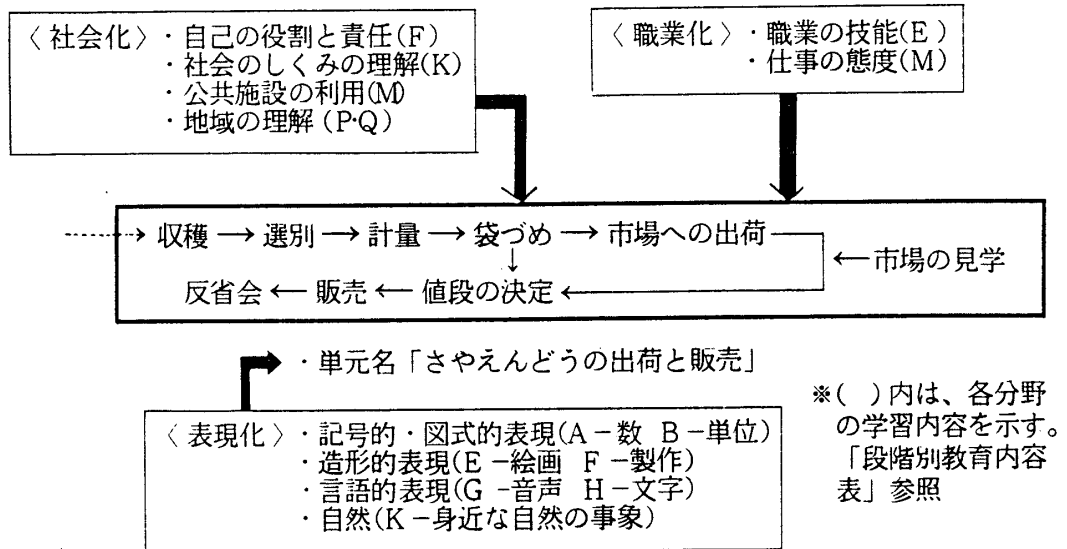
③ 職業化を深めるために

ア 基本的技能・態度の育成 イ グループ指導

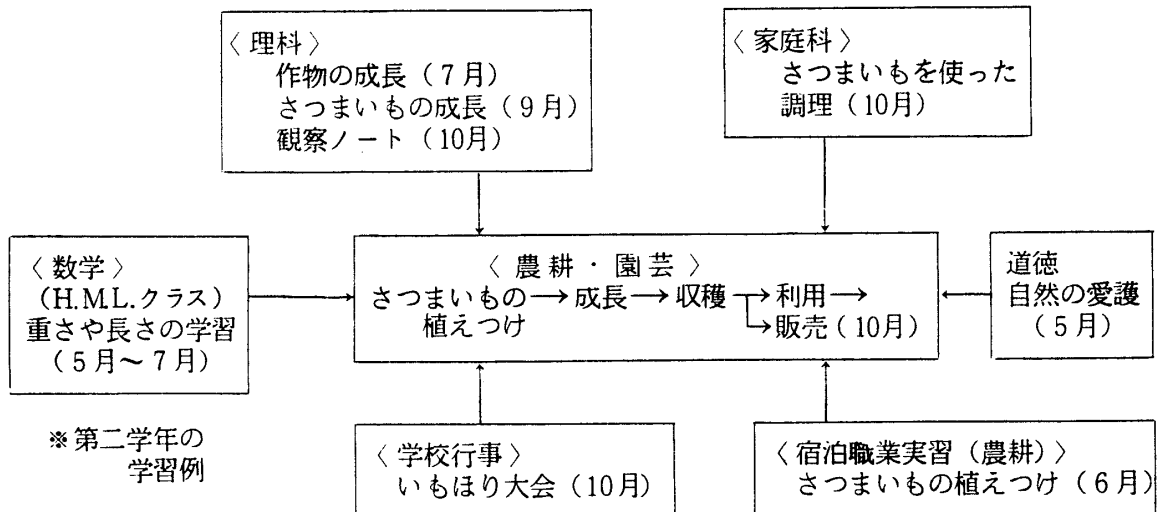
以上のような学習場面を設定して「めざす表現化」に向かってアプローチしていった。以下指導の実際を述べるわけだが、その前に農耕・園芸と各分野との関連、さらにそれを具体化した教科との関連を、構造図によって紹介したい。

(2) 農耕・園芸を中心とした構造図

① 農耕・園芸と分野との関連図



② 農耕・園芸と教科・領域との関連図



(3) 指導の実際

① 校内販売学習

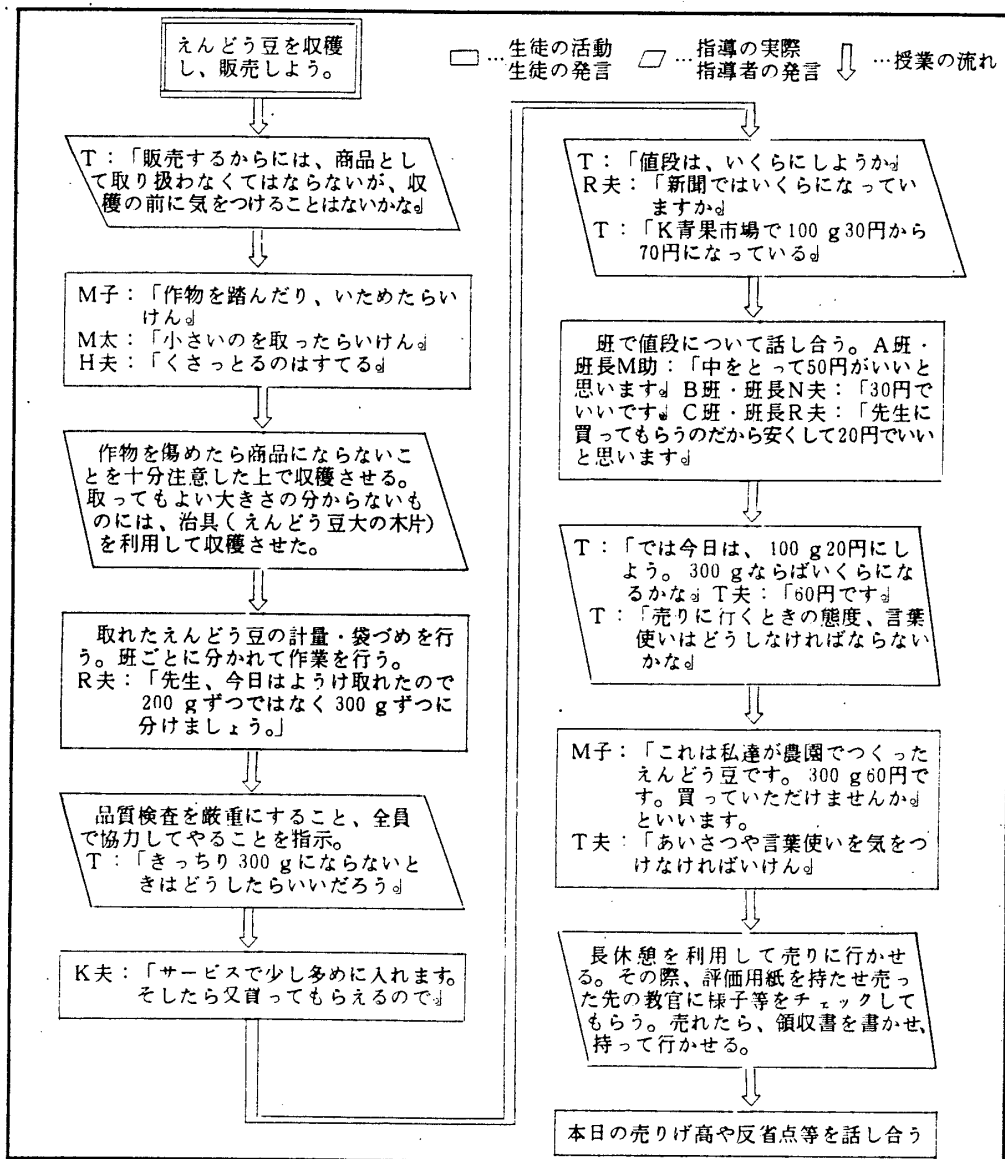
ア 設定理由

段階別教育内容表に記載されている社会化・表現化・職業化の学習内容のなかで、社会化（C あいさつ・E 礼儀作法・K 生産と消費・L 金銭の管理と貯蓄）・表現化（A 数・B 単位・G 音声、H 文字）・職業化（E 農耕園芸・L 実務・M 仕事の態度）を身につけ深めるために設定した。

イ 販売の対象

校内の職員と保護者を対象にしている。職員に対しては、農園作業で収穫したときはいつでも実施している。保護者を対象とするときは、月例の懇話会など保護者が集まる機会に、収穫し、家庭科室で販売している。また、図1のごとく校内をまわって、販売することもある。

ウ 販売学習の実際（図1）



エ 販売評価表

校内を売り歩かせるときには一人ずつで行かせることにしているが、校内の先生方にも協力してもらい、売るときに状況はどうだったかを用紙(表1)に記入してもらっている。売った際には必ず自分で領収書を書かせ持って行かせることにしている。

オ 考察

実際に生徒に販売させることにしたのだが、表現力(特に音声・文字表現)の養成に役立ち、あいさつ・礼儀作法の勉強にもなった。金銭感覚・管理の力の養成にもなり、値段づけも自分達でできるまでになった。当日の新聞の市場価格を参考にし、かなり適切な値段をつけている。

② 校外販売学習

昨年も実施したかったのだができなくて、本年度になってようやく公設市場への出荷が実現できた。出荷したものはえんどう豆とそら豆だったが、生徒にとって印象深い学習になったと思う。というのも実際に市場でセリ落とされるところを見学させたからである。朝早く起き市場に出かけた。市場の係員の協力もあって、せり人仲買人のやりとりを直接見学できたことは何よりの生きた教材であった。生徒達はそこで、きれいにそろえた方が多く売れるとか、傷ものが一つでも入っていたら全部が安く買い叩かれることなど、商品というものがどんなものか、人を買ってもらうことの厳しさがどんなことかを学んだ。むろん自分達で選別・計量・袋づめさせた上でのことである。大根・さつまいもの出荷も予定していたが、他行事との関係でできなかったことは残念である。この市場への出荷は来年度も引き続き実施していきたいと考えている。

※校内宿泊農園作業の項を参照のこと。

③ 観察日記(表2参照)

ア 目的

各種の作物のようすを継続観察させることにより作物への関心を高め、表現化の中の造形的表現力を高める。さらに、苗や種の段階から枯れてなくなるまでを観察させることにより根気強さ

表1 農作物販売評価表

生徒名 〇〇 〇〇 年

1. ドアをノックして入室できたか。 _____
2. 「高専生の〇〇ですが、()の販売に参りました。1個()グラムで()円です。買ってくださいませんか。 _____
3. おつりの計算をし、支払うことができたか。 _____
4. 領収書を正しく書き、提出したか。 _____
5. 「どうもありがとうございました。また、よろしくおねがいします。」といえたか。 _____
6. ドアをきちんとしめて退室したか。 _____

.....

領収書 _____

代金 _____

昭和 年 月 日

〇〇大学附属高等学校
高等部
印



宿泊学習の早朝、市の公設市場の見学で、自分たちの出荷した農作物に見入っている生徒たちである。

や責任感といった態度面を強化するため。

イ 生徒の取り組みのようす

農園に植えてある植物は10数種類になるが、一人が一種類だけ（本人の希望を取り入れて）責任を持って観察した。日記の欄にスケッチする所を設け、必ず、スケッチした。これは、美術担当の教官に協力してもらい、美術の時間に「農園の作物を描こう」という単元を設けてもらい、植物のスケッチの方法を指導してもらった。

ウ 考察

根気の欠ける子が多くいる中での、このような継続した取り組みは、一人ひとりの子供に「継続は力なり」を体得させる意味で大きな効果があった。

④ 農園日誌（表3参照）

ア 特徴

上述の観察日記が個人ごとの日記に対し、これはグループ日誌（作業日誌）といったもので、A・B・C各班1冊ずつ毎時間の作業の様子や感想などを、班員が交替で書くものである。

イ 目的

グループで書かせることにより協調性を養うことと、その日の作業の反省を通して、言語的表現力を高めるため。

ウ 生徒の取り組みのようす

毎時間書いた。障害の重い生徒が書くときには、班長が協力して書いていた。しかし多くは、「草を取った」「くわを使った」といった簡単な文しか書けなかったので、文章表現ということで国語担当の教官に協力してもらい、作業文・反省文の書き方を指導してもらった。

エ 雨天の場合の活用

雨天のため外で作業ができないとき、この日誌を使って反省点や改良点を話し合わせた。

表2 観察日記（R夫より）

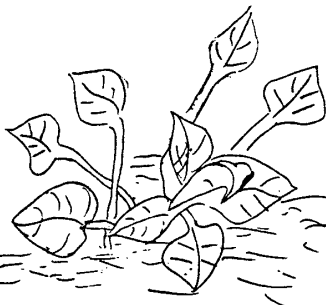
・観察日記	作物名(さつまいも)
1.日時	6月15日月曜日
2.天候(くもり)	3.温度(26°)
4.水・肥料について {雨が降ったので今日は、水はやりませんでした。}	
5.観察スケッチ	
	
6.作物のようすで気づいたこと (もう葉が少しかたまって、少し色が赤い感じがして、新しい葉が出てきた。いふ。)	

表3 農園日誌（3班より）

6月8日	木	K夫
時間	10:30 ~ 2:10	天気 晴
気温	25°	
作業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・赤が少しかたくなる。 ・水で洗った。 ・ ・ 	
ポイント	スイートコーン	20cmから30cmに成長してきた。そのしうによって生育が変化する
反省	そらまめ	しうかくか出来るのが、じょうたいになっている
その他	さやふゆ	葉の色が黄色にそまつ来た。少しかたいては。
感想	水がぶにかがえ、いたのは、なぜか？ 5日作業するのは、みるが協力がいては、一歩もた	

7月4日（土） 雨天 於図書室

M助：「Cはんの6月8日の日記に、そらまめがしうかくできるじょうたいになっていると書いてありますが、どんなじょうたいのことですか」

K夫：「しうかくできるじょうたいとは、大きくふくらんでいることです」

以上のような話し合いが比較的活発に行われていった。

オ 考察

記録をとらせ残すということは、子供達の成長の足跡を知ることと同時に、天候に左右される農園指導を継続させるとともに、作物への興味・関心を持続させることにもつながった。

⑤ グループ指導

ア グループ編成の目的

みんなが力を合わせて働くことの大切さを指導するため、生徒の実態に合ったグループの編成に心がけた。同じグループに能力の違う者がいることで、どうすればグループでまとまった作業ができるかなどを考えさせることにより、チームワークの養成も考えた。

イ 編成の方法

3つの班に編成した。各班にはリーダー、準リーダーになる生徒を配し同じレベルの班になるようにした。本年度は、農園作業の総括として連絡係や号令係を兼ねた仕事をさせるため、T夫を農園のリーダーとして抜てきした。これはT夫の性格・行動面（自尊心が高い、農園作業に対して自信を持っている、家で母を助け農作業をしている、人前で話すのが苦手、人にもものをたずねるのが嫌い）等を考慮したものである。

このグループ編成をもとに実施した学習展開を、6月11日に行った学習指導案により紹介する。



◎陸稲の植え付け作業に参加しないN子

写真左上にすわっているのがN子。彼女は、いつもマイペースで、自分の気にいらぬ作業になると写真のごとく見学に徹する。それでもなおかつ強引に作業をさせようとする、すねてじっと動かなくなる。

◎さつまいもの畝づくりを頑張るN子

写真右から5番目くわを使っているのがN子。上述したごとく、自分の好き嫌いで作業をするN子に対し、我々は徹底的に甘えを許さず、無視あるいは罰を科すという指導を試みた。写真は、しぶしぶやっているところ。



作物（商品）を大切に扱い処理できる子をめざす学習指導案

指導者 国富一郎 56.6.11(木) 第4時限

補助者 福田和則, 出脇典子, 小沢貴美江
村上光重, 安本憲司

1 単元名 そら豆・えんどう豆の収穫

2 単元設定の理由

- (1) 自分達が育ててきた作物が大きく育ち、実を結ぶことは生徒達にとっては大きな喜びである。そら豆・えんどう豆は病気にかかりにくく、成長のようすがよく観察でき収穫から販売までスムーズに持っていける点でかっこうの作物である。自分達の手で播種から収穫・処理・販売と最初から最後まで一貫して粘り強く取り組ませることは、将来の職業自立の上でも大切なことである。
- (2) 本単元は昨年度も扱っており、生徒達には親しみの深い作物といえる。今月初旬の宿泊学習では実際にそら豆・えんどう豆を公設市場に出荷し自分達の作った豆がどれくらいの値段でセリ落とされるか、それに対面させた。その結果、生徒達の販売に関する興味・関心は特に強化され、「作物を傷つけたら商品にならん」とか「同じ大きさにしないと高く売れん」などと言うようになってきている。
- (3) 高等部では単なる作物としてのそら豆・えんどう豆ではなく、商品としてのそら豆・えんどう豆として取り扱っていきたいと考える。そのため、品質検査・計量・市場のしくみ・市況の理解といった販売を想定した学習を多く取り入れるとともに、商品を取り扱う際の態度や技能など各分野の学習が統合され、定着する場としたい。

※生徒の実態

生徒名	性	IQ	CA	MA	特記事項
N 夫	男	45	20.1	9.0	与えられた仕事はきちんとやる。理解力がやや不十分であるため発言は少ないが授業や作業にはまじめな態度でぞむ。
R 夫	男	65	18.7	12.1	幼少児の交通事故の後遺症のため左手が不自由。知識は豊富で理解力があり、発表が積極的である。
M 助	男	71	17.3	12.2	性格は明るくよく気がつき、進んで仕事をする。授業中の発表は少ないが教師の発問は大体理解できる。
M 子	女	45	17.2	7.7	思いやりはあるが、時々感情的になることがある。学習に対する取り組みは意欲的で自分の意見を発表できる。
T 夫	男	57	16.9	9.5	かなりの程度まで学習できる能力があり、作業も粘り強くする。指導力もあるが時々短気をおこすことがある。
H 夫	男	55	16.8	9.2	動作は遅く歩行は付随運動が伴う。理解度は低いが何事も積極的にやろうとする努力がうかがえる。親切がおせっかいにとられることがよくある。
M 太	男	51	16.4	8.3	かなりの程度まで学習でき、教師のいうことも理解が早い。作業もすばやくできるが、私語が多く気をぬくときがある。
Y 夫	男	39	16.4	6.4	口数は少ないが、教師のいうことはかなりのところまで理解できる。授業中、教師をからかうことがある。ダウン症、白内障
K 夫	男	84	16.3	13.7	自己中心的ではあるが、物事の理解は早い。かなりの程度まで学習できる。幼稚な面も持ち合わせており、なまげぐせがある。
S 美	女	40	17.5	7.0	そう状態とうつ状態のときの差が激しい。人真似はできるが理解度は低い。
N 子	女	39	17.2	6.7	教師のいうことは大体理解できるが、自己中心的で気に入らないと動こうとしない。ダウン症
A 子	女	37	16.3	6.0	性格的には明朗である。理解度は低いが何事もやろうとする意欲はある。中脳に障害。
M 夫	男	39	15.1	6.2	自分が興味・関心をもつものには積極的に行動する。口数が少なく消極的である。よくすねて動こうとしない場面がある。
S 子	女	44	15.4	6.7	明朗快活で人なつっこく自己を主張する。言語活動は非常に活発であるが継続性に欠ける。

3 単元目標

- (1) 作物がていねいに収穫できる。(職業化E5)
- (2) 作物を商品として正しく処理し計量できる。(表現化B10, 職業化E9)
- (3) 作物が正しく販売できる。(表現化A, B, G, H)

4 指導計画(22時間)

- 第1次 作物の収穫のし方、計量のし方、販売のし方を理解する。……………2時間
- 第2次 作物を収穫、計量、販売する。……………10時間
- (1) 作物を収穫、計量する。……………5時間(本時は3時間目)
 - (2) 作物を販売する。……………5時間

5 本時目標

- (1) 班ごとにそれぞれの分担した作業(スイカの消毒、そら豆の収穫)が手際よくできる。
- (2) 商品として、そら豆の計量・袋づめが班全員で協力してできる。

生徒名	前時の実態	個人目標	評価	次時目標
N 夫	・計量はg単位までできる。 ・そら豆の収穫がやや雑である。	・そら豆の収穫を正確にする。 ・班長として班員の指導ができる。		→
R 夫	・計量はg単位までできる。 ・そら豆の収穫は片手だが上手にできる。	・できるだけ両手を使ってそら豆の収穫をする。 ・班長として班員の指導ができる。		→
M 助	・計量はg単位までできる。 ・そら豆の収穫もていねいにできる。	・計量を早く正確にする。 ・班長として班員の指導ができる。		→
M 子	・計量はkg単位までできる。 ・一つの作業が長続きしない。	・作業中の私語や中座がなく、根気強く最後まで作業をする。		→
T 夫	・計量はg単位までできる。 ・そら豆の収穫は遅いが一つ一つていねいにする。	・スイカの消毒が正しくできる。 ・農園のリーダーとして自覚を持ち指導にあたる。		→
H 夫	・そら豆の大小の区別はつく。収穫は手が思うように動かず困難である。	・そら豆をていねいに収穫する。		→
M 太	・計量はkg単位ならでできる。 ・そら豆の収穫は早くていねいにできる。	・作業中私語をしないで根気強く最後まで仕事に取り組む。		→
Y 夫	・そら豆の大小の区別はつく。収穫は遅いがていねいにする。	・スイカの消毒がていねいにできる。		→
K 夫	・計量はg単位まで正確にできる。 ・作業中私語が多く見られた。	・作業中私語をしないで根気強く最後まで仕事に取り組む。		→
S 美	・そら豆の大小の区別がなかなかできない。 ・だだをこねて作業をしなかった。	・収穫をしてよいそら豆なのか、悪いのか区別がつく。		→
N 子	・計量はkg単位まででなんとかできる。 ・そら豆の収穫はゆっくりていねいにする。	・スイカの消毒がていねいにできる。 ・指示されたことがすばやく行動にうつせる。		→
A 子	・そら豆の大小の区別がなかなかできない。 ・作業には意欲的に取り組んだ。	・そら豆の大小の区別がつき、収穫ができる。		→
M 夫	・計量はまだできない。 ・そら豆の収穫はていねいにできる。	・スイカの消毒が早くていねいにできる。		→
S 子	・そら豆の大小の区別はつくが、計量はできない。 ・作業中の私語が多い。	・そら豆の収穫が早く正しくできる。 ・作業中私語はしない。		→

6 準備


教師：上皿秤3台、秤台3、網箱、市箱、ネット、噴霧機、バケツ、収穫かご、消毒液、そら豆大の治具
生徒：作業服、農園日誌、筆記用具

7 グループ編成

A 班……M 助、T 夫、Y 夫、N 子、M 夫
C 班……R 夫、M 子、K 夫、S 美、S 子

B 班……N 夫、M 太、H 夫、A 子
(◎印全体のリーダー ○印班長)

8 学習過程

学 習 活 動		指 導 上 の 留 意 点	
1 作業の目的・手順を聞く。 ○班ごとに分かれ、作業に必要な準備ができているか確かめる。確認は班長が行い、リーダーに報告させる。 2 各分担任に従って作業をする。		○全員作業に合った服装をしているかどうか確認する。 ・A班M助, B班N夫, C班R夫が準備ができているか確認する。全体としてT夫に最後の確認をさせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">班ごとに作業の内容を指示する。</div>	
A 班	○噴霧機を利用してスイカの消毒をする。 ・スイカの葉をふまない。 ・人に向かってかけない。	○薬品を使用するので扱いに十分気をつけさせる。 ○葉の表側だけでなく裏側にもかけさせる。 ○全員できるように班長に指示する。	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> M助・T夫……手際よくスイカの葉全体に消毒をする。 Y夫・N子・M夫……噴霧機を上手に使うが、補助者の指示に従う。 </div>		
B ・ C 班	○そら豆を収穫する。	○小さいものを取らないように、治具とくらべさせて取らせる。大・小の区別がよくわかるものは、目分量ではからせ、 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> N夫・M太・R夫・M子・K夫・S子……手早く確実に収穫していく。 H夫・A子・S美……ねばり強く収穫作業を続ける。 </div> どんどん取らせる。	
3 それぞれの作業が、終わったところで、収穫したそら豆を集め、班ごとに分かれて選別・計量をする。 ○そら豆を1kgずつネットに分ける。 ・正しい位置で秤の目盛りをよむ。		○痛んだものや、腐ったものをより分けさせる。 ・班全員が作業に加わっているかどうか注意する。	○班ごとに日誌を書かせ、今日の反省をさせる。 ○次時は、今日収穫したそら豆の販売を
4 農園日誌を書く。 5 次時予告を聞く。		○次時への意欲づけをして終わる。	

エ 指導の考察

班のレベルを同じにしたことで、作業にむだがなくなり能率よく各種の作業が同時にできた。しかし反面、班長に頼りすぎる傾向が顕著になり、班長の育成には役立ったが、それ以外の者との差が大きく開いてしまった。

T夫を総括リーダーにしたわけだが、本人にとってとても良い刺激になったようで、農園作業の時間になると、「早く出ましょう」「少しぐらいの雨でもがんばろう」と高等部全員にはっぱをかけるまでになった。集会での発言や、学習発表会での劇のセリフが大きく自信を持って言えるようになってきた。ただし自信過剰になりすぎたきらいがないでもない。

集団指導というものは、とかく個々の子供を見落としがちとなるが、指導者・補助者の関係を密にした、個々の子供に視点を当てた細かい指導が必要であることを改めて思い知らされた。

(4) 農耕・園芸における評価

学習と評価は不即不離のものである。評価には生徒の知識・技能・態度の評価はもちろんのこと、指導者側の評価、換言すれば指導法改善のための評価も見落とすことができない。農耕・園芸も、この両者の評価をとり入れた授業を進めるべく努力してきた。①で説明する個人記録は、②の評価表の為だけに記入したのではなく、我々が今後どのようなめやすで指導法の改善をしていったらよいかの参考にするためにも活用したものである。評価の具体的な実践事例について、個人記録・評価表・Y夫の場合を通して述べる。

① 個人記録 (表4参照、ただし評価番号は次の②評価表と同一)

高等部の農園担当教員が6人いるので、14名の生徒をそれぞれ2～3名ずつ担当していった年間を通して記録していった。観察項目も生徒の実態に即して3種類の記録用紙を作った。主な観点は、態度面(根気強さ、協力性)と技能面での変化が年間を通じての記録でよくわかり、農機具の使い方が上達していく過程や、草取り作業が体力的に続くようになってきたようすがよくわかった。

(Y夫の6月・11月の個人記録)

表4	1. 月日	6月13日 土曜日 第3校時(農)	11月21日 土曜日 第2校時(園)
	2. 作業内容	(ふんどう豆、キバツの収穫・販売)	(大根の収穫、空孔し販売)
	3. 本時目標	(収穫がよいものにでき、販売がはたかた)	(根・葉の収穫がはたかた)
		個人目標	評価(○△△)
Y夫	表 現 化	・簡単な道具を使って、正確に収穫ができた。	G12(IV) △
		・本時の収穫量に満足し、販売に努めた。	A8(IV) X
職 業 化	職業化	・販売の反省が記録に記された。	H10(V) △
		・本時の作業に満足し、協力した。	E1(IV) △
		・簡単な道具を使った。	E4(V) △
		・販売の反省が記録に記された。	X
		・作業の仕上げができた。	M4(V) ○
		・この作業は、本時の目標を達成し、記録に記された。	M1.6(IV) ○
		・販売の反省が記録に記された。	M12(VI) △
		* 特記事項 ・収穫は何ができた。 ・販売は、売り場へ行って、お金の計算ができて、帰って来た。 ・販売の反省、販売量に対して「よく売れた」とも述べている。	
			・この作業は、本時の目標を達成し、記録に記された。 ・販売の反省が記録に記された。

② 評価表

本表は、内容的には技能面と態度面に分けられるが、分野としての〈表現化〉〈職業化〉が農耕・園芸の場で含む学習内容を評価するものである。①の個人記録を参考にして、学期末ごとに農園担当教官が合議して、自分達の指導法も含めて評価していくことに活用した。

なお、農耕・園芸では〈社会化〉の学習内容も含まれており、本表は更に検討を加え、改善されなければならない。

(Y夫の一学期、二学期の評価)

(高等部) 職業科 農耕・園芸コース

評価項目一覧 (Y夫)

領域	評価内容	段階別教育内容表との関連	7月		12月	
			17日	19日	17日	19日
表 現 化	(1) 作物の数が数えられる	数 A-8	△	○		
	(2) 製品の数を正しく数え 班員に報告できる	" A-8 音声 G-13	X	△		
	(3) 観察日記が書ける	" G-13	○	○		
	(4) 農園日記が書ける	文字 G-13	△	○		
	(5) 農機具の名称がわかる	音声 G-16	△	○		
	(6) 返事が正しくできる	" G-15	X	△		
	(7) はしや前倒しが正しくできる	自然 K-17	X	△		
	(8) 肥料が正しくやれる	" "	△	△		
	(9) 作物に水が正しくやれる	" "	△	△		
	(10) 作物を大切に育てようとする	" "	△	○		
職 業 化	(1) 石ころひろいができる	技能 E-4	○	○		
	(2) 雑草がていねいに見える	" "	○	○		
	(3) うねづくりができる	" "	△	△		
	(4) くわ・スコップを正しく使う	" 3	△	○		
	(5) 一輪車が操作できる	" 3	○	○		
	(6) 耕運機が運転できる	" 7	△	○		
	(7) 耕運機が操作でき運転できる	" "	X	X		
	(8) 水やりがていねいに見える	" -6	△	○		
	(9) 肥料の種類とその効用がわかる	" -6	X	X		
	(10) 選苗 " " "	" 6	X	X		
(11) 保温の必要性がわかる	" 8	X	X			
(12) 収穫物の洗浄ができる	" 5	○	○			

職 業 化	(1) 製品の包装・詰め・詰めができる	技能 E-9	△	○		
	(2) 梱包ほしができる	" "	△	△		
	(3) 作物の切断が正しくできる	" "	△	○		
	(4) 作物を痛めずに収穫できる	" "	△	○		
	(5) お客との応待がていねいに見える	表現 G-15	X	△		
	(6) 収穫物の計量ができる	表 B-10	X	△		
	(7) 収穫物の品質検査ができる	" "	X	△		
	(8) 製品に値段がつけられる	数 "	X	△		
	(9) 市場のしくみが理解できる	社 K-12	X	X		
	(10) 新聞紙上の市場価格が理解できる	表 H-14	X	△		
職 業 化	(1) 領収書が書ける	社 L-9	X	○		
	(2) 畑に入って遊ばない	技能 E	○	○		
	(3) 作業の身じたくができる	態度 M-4	○	○		
	(4) 自分の分担した仕事は最後まで責任をもってする	態度 M-9	△	○		
	(5) 使った材料や道具の後始末ができる	態度 M-12	△	△		
	(6) 作業中の中絶や私語がなく、根気よく作業できる	態度 M-5	○	○		
職 業 化	(7) 決められた仕事を最後までし無断で仕事場所を離れない	態度 M-11	○	○		

評価記号 ○定着 ○ほぼ定着 △やや不十分
×不十分



←◎一輪車を使っての石ころひろい

本校の農園には、造成した畑だけあって石ころがたくさんある。作業のひまをみつけては、せっせと石ころひろいをさせている。アキカンと一輪車を使ってひろいが主に男子が一輪車を使っている。

↓◎カミソリを使ってのさつまいもの苗とり

近くの農家のいも床を使わせてもらい、全員が実際に安全カミソリを使っていも苗を切り取った。切る場所さえ指導しておけば、結構上手に切り取ることができる。



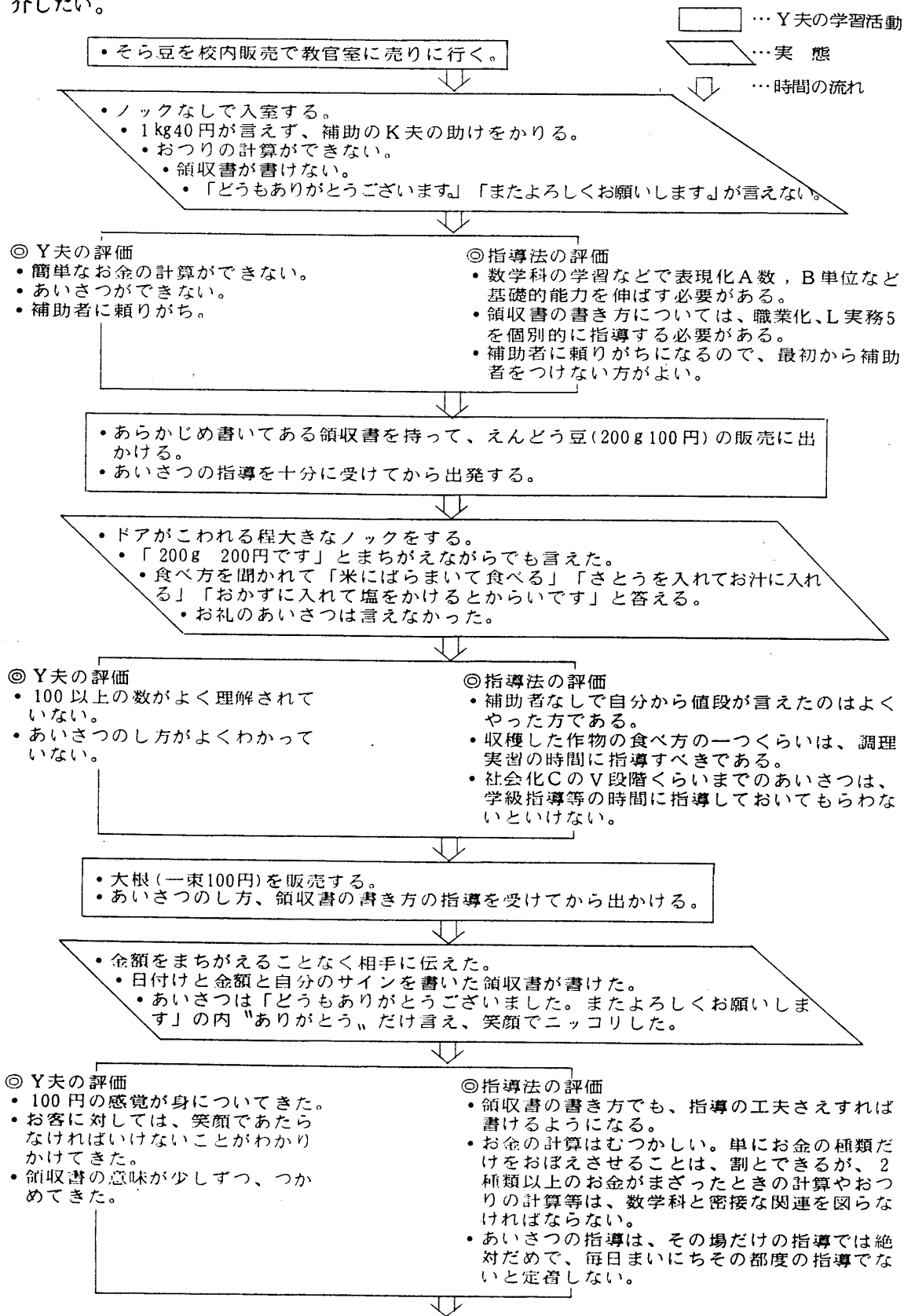
→◎大型ジョロを使っての水やり

さつまいもの植え付けの直後に、一本いっぽんたっぶり水をかけさせた。普段は、スプリンクラーでやるが、植え付けのときはこのやり方でないといけない。大型なので女子には少し重かったが、みな上手にできた。



③ 評価を中心としたY夫の指導事例

①の個人記録を参考にし、個人の評価と指導法の評価をしていった実例をY夫を取り上げて紹介したい。



2 各分野との関連

(1) (表現化)「量と測定」を通してのアプローチ (ミドルクラス)

① 設定理由

農耕・園芸の学習内容のひとつに、自分達が作った作物を収穫し、それらを販売することがあげられる。これらの学習を通して、生徒達は将来の社会的自立に必要な基礎的・基本的な表現能力の一端を習得するといえよう。

さて、生徒達は農耕・園芸の時間に、収穫物を長さや太さで判断し収穫したり、とれた収穫物を計量し販売している。これらの場面では、長さや重さのはかり方の知識・技能が必要とされる。また、消毒をする際には農薬を調合しなければならないが、この場面ではかさの知識・技能が必要とされる。実際に生徒達の中には、収穫物を計量しなければならないのにはかり方のみこめないのでまごまごしている者、農薬を散布しようというのに農薬の原液と水の配合の仕方がわからず学習に参加できない者がいた。

このような生徒達が長さがはかれ重さがはかれるようになることは、収穫の喜びにもつながりひいては販売の意欲・自信にもつながると思う。そこで数学では、農耕・園芸の学習で生かし使うことができ、将来の社会自立に必要な表現する力を養うため、ここに「量と測定」の単元を設定し、実践してきた。

② 指導計画

数 学	月	農 耕 ・ 園 芸
◎長さくらべ (5 時間) ア．えんぴつで何本—1 イ．30cmものさし—2 ウ．ぼくの身長 わたしの身長—2	5	◎そら豆・えんどう豆の収穫 "10cm以上に実ったえんどう豆の収穫" ア．10cmの棒とくらべる イ．10cm間隔を目測する。 ◎西瓜・ピーマン・とうもろこしの植えつけ ア．親指と小指とをいっばいに伸ばした長さ2つつ分 イ．30cm間隔を目測する。
◎重さくらべ (6 時間) ア．シーソーあそび—1 イ．台上ばかりで はかるう—5	6	◎トマト・キャベツの計量 ア．台上ばかりで200g計量する。 ◎さつまいもの植えつけ ア．農圃の $\frac{2}{5}$ の広さに植える。 イ．30cmの木をあてて植え場所を決める
◎重さをはかるう (2 時間) ア．みんなで何g—2 ◎広さくらべ (3 時間) ア．どっちが広い—3	7	◎トマト・キャベツの計量 ア．台上ばかりで200g計量する。
	10	◎さつまいもの計量 ア．台上ばかりで5kg計量する。
	11	◎玉ねぎの植えつけ ア．親指と小指とをいっばいに伸ばした長さ1つつ分

注 →印……数学で取り扱った学習が農耕・園芸において検証される。
 ←印……農耕・園芸での実態に基づき指導した学習内容

③ 「重さ」についての実践例

「量と測定」の分野には「長さ」「重さ」「広さ」「かさ」などの領域がある。ここでは、他の領域については割愛し、「重さ」の学習についてその実践を述べることにしよう。クラスの生徒は、1年1名・2年3名（内女子1名）・3年1名の計5名で編成されるミドルクラスである。なお以下の指導事例は6月に実践したものである。

ア 生徒の実態（個数/全体数）


- g・kgの言葉を知っている者…………… 2/5
- 体重計や上皿ばかりが重さをはかる道具であることを知っている者…………… 5/5
- ただし「重さ」の言葉がでない者…………… 2/5
- 数字が100以上1000まで完全によめる者…………… 1/5
- 簡単な補助で数字が100以上1000までよめる者…………… 2/5
- はかりを見て1目盛りが何gを表しているかを自分で考えれる者…………… 0/5
- 1目盛りが何gを表しているかがわかれば自分で目盛りがよめる者…………… 1/5


以上が「重さ」の単元を取り扱う前の実態である。

イ 目標

- (ア) いろいろな重さをはかる器具があることを知り、それらの用途を知る。(表現化B-8)
- (イ) 自分達が収穫した野菜を台上ばかりで計量する技能を養う。(表現化B-10・13)
- (ウ) 品物を販売する際の計量には、正しく計量しなければならないことを知る。(同上)

ウ 指導の実際（6月11日・23日）

学 習 活 動	教師の活動・意図・留意点	生 徒 の 反 応
<p>1 いろいろなはかりを知る。 (1) 体重計 (2) 台上ばかり</p> <p>2 目盛りを読む</p>  <p>※OHP利用：目盛りは10とび・50とび・100とびのものと、それぞれ途中の区切りの数字しか記入していないもの6種類を用意した。</p>	<p>T「これは何をする道具かな」</p> <p>T「数字が書いてあるけど読めるかな」</p> <p>T「はりがさしてあるところは何gかな」</p> <p>※OHPを利用した利点</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> • 目盛り解読の練習が一齐にできる。 • 目盛りの数字をつけたりはずしたりできる。 • 白内障等の視覚障害の生徒がおり、大きく写し出されて見やすい。 </div> <p>T「5の次は」 ←</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>目盛り読みの興味・関心を深めるためと、より正確に読めるようにさせるために、生徒どうして問題を出しあわせる。</p> </div>	<p>N夫「人のおもさをはかるもの」</p> <p>Y夫「いもをはかる」</p> <p>M夫「読めるよ。100・200……」</p> <p>M夫「はい50です」</p> <p>N夫「50グラムだよ」</p> <p>N子「100グラム……500グラムわかりません」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>指導の結果</p> <ul style="list-style-type: none"> • 区切りの数字を見て、1目盛り何gか判断できる…1/5 • 教師と共に1目盛り何gか判断する……4/5 • 1目盛り何gかがわかればどの目盛りも読める……5/5 </div>

学 習 活 動	教師の活動・意図・留意点	生 徒 の 反 応
<p>3 大根を 300 g はかる。</p> <p>(1) 300 g の目盛りをさがす。 (10 g ずつ目盛りがつけてある台上ばかり)</p> <p>(2) 300 g に印をつける。 (3) 300 g の大根をはかる。</p> <p>※使用した大根は、全員で収穫・洗浄した早生大根で 1 本の重さが 20~30 g の物である。</p> <p>4 袋づめにする</p>	<p>T 「100 g のところはどこかな」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>それぞれの数え方で数字のつけてあるところまで数えさせ、正否を確認させる。</p> </div> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>T 「500 g の目盛りと同じ太さの線で書かれているところを 100 とびで数えるんだね」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>1 目盛りが何 g かの指導でなく、数字がつけてあるところと同じ線の太さのところを数えていけばよいことを指導する。</p> </div> <p>T 「300 g に印をつけよう」 T 「さあ、300 g の大根をはかろう」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>商品として、重さの厳格性が大切であることを指導した。  部分ではいけないことを指導する。</p> </div> <p>T 「さあ袋に入れよう」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>袋には g を書く練習をかねて 300 g と記入させる。</p> </div>	<p>H 夫 「1 番はじめの目盛りです」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> • すぐ見つけた……1/5 • 10 とびで数えていった…2/5 • 最初が 100 g ……2/5 </div> <p>H 夫 「やった！ 500 g とあった」</p> <p>5 人共まちがえないでつけた。 M 夫 「何本くらいかなあ」 Y 夫 「すぎたよ、どうしよう」</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>大根を大きいのも小さいのに取りかえ各自 5~6 回の試行で全員ちょうど 300 g はかった。</p> </div> <p>N 夫 「大切に入れよう」</p>

④ 学習後の生徒の変容

以上のような「重さ・長さ」の指導を行って、生徒達がどのように変容したかを、指導後の作業学習（農耕・園芸）での実態を通してその変容ぶりを述べることにする。

氏 名	指 導 後 の 変 容	
	「 長 さ 」	「 重 さ 」
M 夫	すいかの茎を見て「先生長いよ。何cmかな」とか、スイートコーンを見て「スイートコーンはぼくより高いよ」という。	4月当初は教師に頼る傾向が見られたが、指導後は教師の補助をはねのけるようにして計量に取り組む。
Y 夫	大根の葉を見て自分から「前より長い、大きくなった」といった。	300 g のキャベツを自力で計量できるようになった。
H 夫	他の学習でも長さの話がでるとすぐものさしではかろうとする。	300 g の目盛りの位置は自分でさがせないが、補助してやるとわかりその後は自分でそこまでキャベツをのせる。
N 子	親指と小指をひろげた 2 つ分の時のつぎたしがうまくできなかったが、指導後は 2 つ分を上手にはかり、その位置に玉	計量学習にはほとんど参加しなかったが、指導後は自分から参加し、300 g のトマトを計量した。

氏名	「長さ」	「重さ」
N	ねぎの苗を植えた。	
N 夫	農園日誌に大根の成長のようすを、「今日の葉は5cm、今日は10cm」と長さで書くようになった。	以前は自分のことで精一杯であったがまごまごしている友達に計量の仕方を教えられるようになった。

このように生徒達は、農耕・園芸の時間においてわずかな進歩ではあるが、「重さ・長さ」を意識し、また実際に生かし使えるようになった。特に農作物の計量学習には進んで参加できるようになった。

⑤ 問題点

数学の時間に長さの測定や重さの計量について学習する。その学習したものは単なる知識の習得だけにとどまらず、その知識がどれだけ生きた力となり、実生活の場で使えるかが大切である。そこで、その目的に近づく実践的な学習の場として農耕・園芸が設定されているわけである。たとえば、作物の成長の度合いを測ったり、収穫物を販売のために定量ずつ計量しパックづめする等の場面がそれである。そして、これら作業学習の場面でこうした操作が正しくできれば、生徒達の活躍場面・自己表現の場面が増え成就感も増すのである。このような点を考慮し、今後の数学の指導に課せられる問題点をあげてみる。

ア. 農耕・園芸にとどまらず他の作業学習との関連をどう踏まえるか。



- ・作業学習の指導計画と関連づけた指導計画をたてる。
- ・作業学習の場を想定した学習内容にする。

イ. 家庭や園での生活にどう結びつけていくか。



- ・日常生活の中でも機会あるごとに指導する。

ウ. 作業学習等で学習が生きてこなかった生徒をどのように指導するか。



- ・グループ編成の検討・個人ごとのカリキュラムの作成、スモール・ステップで指導する。

エ. 数学の評価はどのようにしたらよいか。



- ・数学の学習だけの評価でなく、各教科・領域が統合化された作業学習（たとえば農耕・園芸）の中で評価していく。



- ・次学習・単元での目標・指導内容に生かす。

以上の4つがあげられる。今後これらの問題点を解決すべく研究に取り組みたい。

(2) (表現化) 「作物の成長」を通してのアプローチ (第2学年)

① 設定理由

作物は種をまき苗を植えさえすれば後は自然に育つかというとそうではない。土地作りを初めとして施肥・水やり・除草・消毒など人工的な手を加えてこそ八百屋やスーパー・家庭の食卓などで見られるような作物となるのである。実際、生徒達は農耕・園芸の学習を通して上記のような作業を行っている。そして、こうした作業学習を行うなかで農耕・園芸に関する基礎的な知識技能・また勤労態度を習得しているわけである。

しかし、作業学習の場合、ややもすると作業を通しての技能や態度の育成に偏りがちだともいえる。そこで、作物が成長するためにはどんなことをしなければならないか、どんなことが必要かしっかりと理解させることにより、作業への意欲や興味・関心を高めるため、理科の学習を通して農園作業へのアプローチを試みた。「作物の成長」の単元はその試みの一端である。

② 指導計画

理 科	月	農 耕 ・ 園 芸
	6	◎農園宿泊作業 ア. さつまいもの植えつけ
◎作物の成長 (2時間) ア. 作物を育てる上での水やりや施肥などの必要性について——— 1 イ. 防虫・消毒のための農薬や草とりの役割について——— 1	7	◎夏野菜の収穫 ア. 施肥・農薬・水やり イ. スイカ・ナス等の収穫
◎さつまいもの成長 (2時間) ア. さつまいもの育ち方の観察—— 1 イ. さつまいもが成長するための諸条件——— 1	9	◎秋まきの花の播種・管理 ア. 播種・管理
	10	◎さつまいもの収穫 ア. さつまいもの収穫・処理
	11	◎そら豆・玉ねぎ等の植えつけ ア. 植えつけ後の世話

③ 「作物の成長」についての実践例

ア 生徒の実態 (個数/全体数)

- ・春に咲く代表的な花の名前を知っている (6/8)
- ・植物が育つには、どんなものが必要か知っている (3/8)

・農園でとれる作物を全部知っている (3/8)

・農園でとれる作物を少し知っている (5/8)

イ. 指導目標

・作物が成長するための諸条件 (施肥・除草等) がわかり、農園で実際に行うことができる。

(表現化K-17)

ウ. 指導の実際 (7月7日・7月14日)

学 習 活 動	意 図 ・ 留 意 点	生 徒 の 反 応
1. 農園に植えてある作物を発表する。	T. 生徒の実態に応じ、準備した作物を示して、発表させる。	<p>スイートコーン・ピーマンを知らない生徒が3名いた。後は全部の生徒が発表できた。</p>
2. 成長の様子を観察する。	T. 実際に農園に出て、植えた時と現在の様子とを比較させる。	<p>N子「トマトが赤くなっている」 S美「大きいスイカ」 H夫「スイートコーンがほくの背より高くなっている」</p> <p>全員が作物が大きくなっていることに気づく。</p>
3. 作物が成長した理由を発表する。	T. 作物の植えつけから収穫までの作業の様子をスライドでみせ、思い出させる。	<p>A子「じょうろでさつまいもに水をやりました」 T夫「トマトとスイカにくすりをまきました」 Y夫「草とりをやった」 N子「畑にけいふんをまきました」</p> <p>スライドを見たことにより全員から発言が得られた。</p>
(1) 施肥・水やりが必要なわけを考え、発表する。	T. 人が生きていく上で必要なものは何だろうか、という問いを足かりに考えさせる。	<p>H夫「人間は水を飲むし、ごはんも食べる」 K夫「作物も生きとるな」 T夫「だから、作物も水を飲まんといけんし、ごはんも食べんといけん」</p> <p>実際にスプリンクラーで水をまかせることにより、水やりへの興味を高める。</p>
(2) 除草が必要なわけを陸稲を観察することによって、気づく。	T. 草とりができなかったので、陸稲の様子を観察させ、除草の必要性に気づかせる。	<p>A子「草がいっぱい」 M太「稲がみのっとらん」 K夫「これではいけん」 T夫「草とりをしっかりやらんといけん」</p> <p>草とりをしなかったために陸稲が実らなかったことに気づく。</p>
(3) トマトやスイカを観察することによって、農薬の必要なわけがわかる。	T. 腐ったトマトやスイカを準備しておく。	<p>T夫「虫が食べたから」 M太「ばい菌がはいたから」 K夫「大雨が降ったから」</p> <p>腐ったところは消毒が十分でなく、実っているところは消毒も十分やったからという結論が出る。</p>
4. まとめをする。	T. 作物の成長に必要な作業とその理由を発表させ、記入させる。 ・農園作業への意欲づけを行う。	<p>施肥・水やり・除草・農薬散布の必要性</p> <ul style="list-style-type: none"> 理解できた (3/8) だいたい理解できた (4/8) 不十分 (1/8)

④ 学習後の生徒の変容

ア. 十月頃、球根を植えようということで、球根を植えた。この時、水当番を決め毎日水をまくことにした。最初の頃は決めた当番で水をやっていたが、一ヶ月ほど過ぎると当番を忘れる生徒も出てきた。そんなある日、T夫が次のように言った。「水やりを忘れとる人がおるけえ注意せんといけん。水をやらんと花がかれてしまうけいな」この言葉を聞いていたH夫が、今までほとんどしなかったが、その日から水やりをするようになった。

イ. さつまいもの収穫のとき、さつまいもにたくさん穴があいていた。これを見てK夫が「これはなんですか」と尋ねてきた。即座にみんなを集め、どうしてなったんだろうか話し合わせた結果、虫が食ったんだということになった。すると、M太が「消毒がたりませんでしたね」と発言した。

ウ. 理科の学習とは少し離れるが、学習発表会の高等部の「因幡のかさ踊り」という劇で雨がずっと降らず、日照続きの場面があった。その場面で作物がもだえ苦しむところを演じる中で作物たちのせりふを生徒たちと一緒に考えた。その結果、「雨よ降れ！」「水をくれ！」「僕たちを殺さないでくれ！」といった意見が生徒たちの方から出た。そして、豆になった生徒も、芋になった生徒も力いっぱい演技をし、大きな拍手を受けた。

以上が顕著な学習後の生徒たちの様子である。ア. ウでも分かるように水の必要性というものを生徒たちは強く感じとっている。イにおいては、防虫剤をまいても虫に食われているということで、生徒の考えに混乱を招いたが、M太の発言により一部の生徒ではあるが、農薬の必要性を再認識したものと考えられる。

⑤ 問題点

以上のように学習を展開してきた結果、生徒の変容が特に顕著に見られたのは水やりである。これは、花に水をやるなど、生活の中で生かされる場面が多々あり、自然とその必要性も生徒の中に定着していった。ところが、施肥、草とり、農薬の散布は、その必要性を理解している者もいるが、数名は、今回の授業だけでは定着しなかったようである。それは、理科で取り扱った学習が農耕・園芸において生かし使う場面が少なかったためだと考える。したがって、学習時期を七月九月だけでなく、四月五月にも計画し指導していかなければと反省している。やはり、生徒たちにとってその時期と繰り返しの学習がとても大切であると痛感した。

この実践を通して、実際に生徒の変容が見られたのは極わずかではあったが、作業が単に作業で終わるのではなく、「水をやらなければ花が枯れる」「薬をまかなければ虫に食われる」といった目的意識を生徒たちに持たせることが、作業に対する意欲や根気をより一層高める上で重要であると確信した。

(3) (職業化)「農園でつくった作物の利用と調理」を通してのアプローチ (第3学年)

① 設定理由

精神薄弱児が将来の家庭生活に適応するため学習すべき内容は、被服、食物、住居等と多岐にわたっている。中でも食生活は、人間が生きていくうえで最も基本的なものであり、材料を求め、調理をし、食べ、後始末をするといった過程を習得することは、家庭生活を営む上での不可欠なものといえる。そのためには、女子ばかりでなく、男子も家庭科を学習することが、家族の一員としての態度を養い、食生活ひいては家庭生活を円滑にするために必要といえよう。

調理の材料は、スーパーマーケット、小売店等、どこにでも売ってあるが、本校ではなるべく農園でとれた作物を利用している。農園の野菜の種類には限度があるが、それぞれの季節に自分の手で育てた新鮮な野菜を利用することにより、野菜に対する目も養われ、調理によって基礎的な技能が習得でき、また個性に合わせた盛りつけもできるわけである。そして、何よりも、自分たちが汗を流して育てた作物を調理することの喜びは他にかえがたいものがあるといえる。

男女とも、この学習を経験することによって、少しでもよい作物を多量に作ろうとする農園作業への積極的な姿勢を育てていきたいと念ずるものである。

② 指導計画

家庭科	月	農耕・園芸
○調理 みそ汁(二十日大根を利用)「高一」 ○簡単な朝食をつくろう まめごはん「高二」	5	えんどう豆、そら豆、ラディッシュ(二十日大根)の収穫
○野菜の調理「高一、高二」 ラーメンの具(キャベツ)みそ汁(早生大根)	6	キャベツ、早生大根の収穫
○調理(農園で収穫した野菜を利用して調理する) みそ汁(じゃがいも)サラダ(トマトとピーマン) 「高一」 ○臨海学校(ポテトサラダ、つけ合わせ)	7	スイカ、ナス、トマト、ピーマン、オクラ、とうがらし、スイートコーン、じゃがいも、いんげん豆の収穫
○さつまいもをつかった調理 かりんとう、ぶた汁「高一」 天ぷら、ふかしいも「高二」 ○さつまいもを使ったおやつをつくろう スイートポテト、いもかりんとう、大学いも「高三」	10	さつまいもの収穫
○漬物をつくろう 焼ちゅう漬け、ぬか漬け「高全」	12	大根の収穫

③ 「いもかりんとう」についての実践例

ア. 生徒の実態

- ・さつまいもを利用した料理の種類は少ない。(焼きいも、天ぷらなどしか知らない)

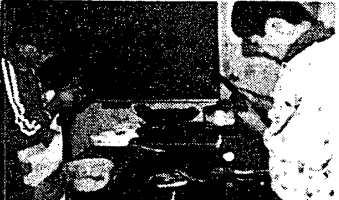


- ・男子は食べることには強い興味をもっていたが、作るのは他人ごとだと思っている。
- ・小さいもの、少しでもくさっているものは捨てがち。
- ・皮をあつくむく。
- ・自分たちが農園で作ったものを使い、調理し、みんなで食べる経験は少なかった。

イ. 目標

- ・「いもかりんとう」をつくることができる。(職業化B-8)
- ・用具を安全に正しく使うことができる。(職業化B-4)
- ・材料を大切に扱うことができる。(職業化M-8)

ウ. 指導の実際(10月9日)

学 習 活 動	教師の活動・意図・留意点	生徒の反応
1. 本時学習を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・市販されているいもかりんとうを見せ、これにまけないものを作ろうと意欲づけをする。 	<p>M子「おいしそうだな」 M助「ぼくたちにも作れるだろうか」 R夫「よし、つくるぞ」</p>
2. さつまいもを畑にとりに行く。	<ul style="list-style-type: none"> ・土中の芋を直接掘らせる。自分たちがいっしょうけんめい作った芋だという実感をもたせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・つるについている芋は、どれも一つ残らずとっていた。 ・一個ずつ大切にみつがっている。 ・M子「穴があいている」 N夫「小さいなあ」 M助「形がいいなあ」
3. 調理室へもってかえり、きれいに洗う。	<ul style="list-style-type: none"> ・水を出しながら、きれいに土をおとさせる。 ・洗う時に皮に傷をつけるとそこからくさってくることにふれておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・商品として市場に出す時に、土を落とす作業を経験しているので、傷つけないようにしようとしている態度がみられた。
4. 皮をむく。	<p>◎包丁のうまく使えない生徒について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・左ききの生徒(N夫) 包丁の刃が逆についているせいかうまくつかえない。皮むき器を使うように指示する。 ・左手の不自由な生徒(R夫) はじめから皮むき器を使わせようとしたが包丁でむくと言うのでさせた。常時側に付きそい危険防止に留意する。 	<p>N夫・右手で少しやってみたがうまくできない。自分でもはがゆいらしくまた左手にもちかえた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・皮むき器を使いはじめたがはじめは刃のつき方、もち方がわからないようでもむけない。そのうち皮むき器と芋の角度などを変えていると工夫していた。 <p>R夫・家で手伝いをしているせいか上手に皮をむいていた。体で芋をささえたり、まな板の上に固定したりしながらむく。</p>

学 習 活 動	教師の活動・意図・留意点	生 徒 の 反 応
<p>5. 細長く切る。</p>	 <ul style="list-style-type: none"> • M子, M助にはゆっくりとていねいにむくよう指導する。 	 <p>M子・じゃがいもや人参の皮をいつもあつくむいていたが、さつまいもをよくみて、うすく長くむけるようがんばっていた。</p>
	 <ul style="list-style-type: none"> • くさっている部分はおいしくないので切りとるように指示する。  <ul style="list-style-type: none"> • 市販のかりんとうをもう一度見せ、長さを自分の目で目測させる。 • 細長く切る方法の一つに拍子木切りがあることを理解させ、二人ずつ集めて、実際にしてみる。 • 一人ずつ芋のむきと、包丁のむきを指示していく。 	 <ul style="list-style-type: none"> • 包丁のつかえる生徒は、包丁の刃の手前で取り除いていたが、皮むき器をつかっていたN夫、左手の不自由なR夫は、スプーンをつかい取り除いていた。 <ul style="list-style-type: none"> • 生徒の目の前で切ってみせたが理解できないらしい。 N夫「これでいいんですか」何度も聞き返す。 • 芋をななめに切る時、輪切りに近くなったり、厚さが様々であったりして同じ長さにはなかなかならず困っていた。(M助) 

学習活動	教師の活動・意図・留意点	生徒の反応
6. あく抜きをする。 (ボールに水をはり細長く切ったものから水にさらしておく)	<ul style="list-style-type: none"> • あく抜きの手順(ボールに水をはり、切ったいもを入れる)を指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 水道の水を流し、ボールの上にごるをおき水にさらしていた。(R夫)
7. 水を切る。	<ul style="list-style-type: none"> • ごるにうつし、ふきんの上で一度水をきり次に少量ずつふきんで水気をふきとるよう指導する。 • 油と水の不調和を説明し、水が残っていないようにさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 油と水がいっしょになると油がとぶことを今までの生活の中で体験しているせいか、少しずつ根気よくふきとっていた。
8. 油で揚げる。	<ul style="list-style-type: none"> • 油の温度は火加減次第で高くなること、水が残っていれば油がとぶこと、取り扱いを慎重にしなければ大ケガをすることなど注意し、安全な取り扱いを身につけさせるよう指導する。 • 芋の入れ方や量をわからせる。 • 左手の不自由なR夫についてはなべを片手で押えることができないので、二人で協力してするよう、またそばについているようにつとめる。 • 揚げた芋は、揚げ紙の上に広げるようにしておく。重ねると油がきれずベタベタすることを実際に見せる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 油で小さいやけどをした経験をもっているらしく、ゆっくり芋を入れたり、また芋を引き揚げるときには、片手をそえたりしていた。 • はじめの油の温度を調べるために塩を入れていたが、食卓塩であるため音がしない。 • 材料を多く入れるとなかなか揚がらないことがわかったようだ。 • R夫・自分でも油の取扱いは気をつけているらしく、一人でするときには、友達に「なべを持っててくれ」などと、声をかけながらしていた。 • 油がきれた芋から別の紙にうつしていた。
9. 砂糖と水を火にかけ煮つめる。	<ul style="list-style-type: none"> • 砂糖を煮つめるとあめになり、それ以上煮ていると黒くカラメル状になること、またあめ状になったものをさますと固くなることを実験し、熱いうちからめることの必要性に気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> • あめ状になるのを見ながら、M子「あめになるんだ」
10. 揚げた芋を入れ、からめる。	<ul style="list-style-type: none"> • まぜ方が乱暴なので、まぜ方を示範する。 	<ul style="list-style-type: none"> • M助「かたくて食べれんようになる」 • 熱いうちに揚げた芋を入れていたがしゃもじでかきませすぎ、長い芋も折れ短くなっていた。
11. 試食する。(テーブルの方へ運んで、みんなで食べる)	<ul style="list-style-type: none"> • 班により盛りつけ皿をかえさせる。 • 自分たちでおいしそうに盛り方を工夫させる。 	<ul style="list-style-type: none"> • M助がなべから皿へ芋をうつし、M子がそれを上手に盛りつけていた。
12. 他の先生の所へもっていく。	<ul style="list-style-type: none"> • 感想を必ず聞いてこさせる。先生方の感想は反省会の時発表させる。 	
13. 反省会をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> • 自分が作ったという意識をもたせないで、感想を発表させると共に、先生方の感想もいわせる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 生徒の意見交換 • R夫「もう少し細い方がいい」 • M子「長く切ったのに、短くなっている」 • 先生方の感想 「おいしかった」「もう少し上手に盛ってあればよかった」

学 習 活 動	教師の活動・意図・留意点	生 徒 の 反 応
14 後始末をする。	・あめのついているなべは、湯を使う方が落ちやすいことを指導する。	・水につけて、力まかせに洗っていたが湯で洗うことを指示すると実際に試みて、R夫「あっ、ほんとだ、落ちやすい、つめたいと固まるだけえな。」

④ 学習後の変容

さつまいもを使ったおやつ三種類（スイートポテト、大学いも、いもかりんとう）を学習した後、家庭で作り食べてもらおうと話し合った。日にちは、家の人たちも見て下さるように、土曜日、日曜日とした。また、そのとき家庭の方へアンケートをお願いしたが、その結果の一例は下記に示す。

「さつまいもを使ったおやつをつくろう」 （R夫の母）

ア 何をつくりましたか……………大学いも。
 イ 切り方はどうでしたか……………乱切りはできました。
 ウ 味はどうでしたか……………少し甘かった。
 エ 盛りつけ方は……………良く出来た。
 オ 油の使い方は……………少し心配でそばで見えていましたが、大丈夫でした。
 カ 感想
 乱切りの時、手を切るのではないかと少々心配でしたが、他は全部やりました。

月曜日に登校した時には、「おいしかった」「家の人もおいしいって言ってくれた」「細く切れるようになった」「一人で行けるよ」などという声が聞かれ、自分で調理し食べてもらう喜びを感じたようであった。今後も、学習したものを家で作ってみようという意欲が感じられた。

⑤ 問題点

精神薄弱児にとって、自分の手で育てた作物を調理し、食べてもらうことは、大変な喜びである。日常生活の中ではあまりしないのか、家庭科の時間には男女とも喜んで取り組み、出来上がったものに対して「おいしい」の言葉が連発される。これらの言葉を聞いていると、生徒たちの調理に対する意欲的な態度を家庭の中でもっと伸ばしていかななくてはならないと思う。

本学習では、さつまいもという農園で収穫された一つの材料を用いおやつを作り、みんなで試食したが、農園で作ったものを利用し、いろいろな調理法を身につけるためには、種々の野菜が毎月ある方が望ましい。

今後、障害の重度化、多様化が予想されるなか、個人に合わせたむずかしい技術をとまなわれない調理法や調理道具が必要である。

(4) (社会化)「農産物の流通」を通してのアプローチ (第3学年)

① 設定理由

本校の生徒たちは、農産物の収穫後、計画的に校内販売を行っている。これは、人への対し方を訓練する場として、また、金銭処理の能力を高める場として、恰好の学習の場といえよう。しかしながら、本来の農産物の販売(売買)は、どのようにして行われているのか、また、それは産地からどのようにして消費者の手に渡るのかなどは、テレビなどで見たりしている程度で、漠然とした知識しかもっていない。したがって、ここでは学校で収穫した農産物がどのようにして市場に出荷され、どのような過程を経て、消費者の手に渡っていくかといった流通の大まかなしくみを学び取らせたい。

生徒たちは、この学習を通して社会生活への理解を深めるとともに、この学習が基盤となつてよりよい作物を育てるべく積極的に農園作業へ取り組む態度を育てたいと思う。

② 指導計画

社 会	月	農 耕 園 芸
	6	◎ 農園宿泊作業 ① 農産物の出荷作業 ② 市場の見学
◎ 農産物の流通 (4時間) ア、農産物の流通・販売 (2) イ、新聞紙上の市場価格 (1) ウ、農園作業の大切さ (1)	7	◎ 夏野菜の収穫 ① 夏野菜の収穫と整理 ② 収穫物の販売 ③ 施肥、水やり、農薬の散布
	10	◎ さつまいもの収穫 ① さつまいもの収穫 ② さつまいもの袋づめと販売
	11	◎ 大根の収穫 ① 大根の収穫 ② 学習発表会での即売会

③ 農産物の流通についての実践例

ア、生徒の態度 (個数/全体数)

- ・ 農産物を産地から市場へ輸送する方法を知っている…………… 4 / 4
- ・ せり人、仲買人の呼び名がわかる…………… 4 / 4
- ・ せりの意味がわかる…………… 4 / 4
- ・ 農産物の値段は、どのようにして決まるか、理解できている…………… 1 / 4

- ・ せり落とされた農産物の値段が、店頭に出ると高くなるわけが理解できている …1/4

イ、目 標

- ・ 農産物の流通の過程がわかる。(社会化K-12)
- ・ 農産物を大切に育てようとする。(職業化M-7)

④ 授業の実際(7月8日)

学 習 活 動	教師の活動・意図・留意点	生 徒 の 反 応
1. 農園で収穫した農産物は、どこへ出荷されたか発表する。	1学期に見学した市場のVTRを見させ、思わせる。	M助:「市場です。」 R夫:「公設市場です。」
2. 公設市場へ農産物を出荷する時には、何を使ったか発表する。	T:「公設市場まで運ぶには、何を使ったかな。」 ・ 農産物を輸送するものとして、ほかにないか考えさせる。 ・ 20世紀梨の輸送風景をTVで見たことがあるので、その時の様子を思わせる。	M助:「軽トラックです。」 R夫:「大八車です。」 N夫:「リヤカーです。農家のおばさんが使っています。」 M子:「ほかにもあります。自動車です。」 M助:「大型トラックでも運びます。」
		いろいろな発言を通して、輸送機関がたくさんあることが理解できた。
3. 農産物の値段は、どのようにして決まるか考え、発表する。	T:「せりは、どんな人たちが集まっていたか。」 T:「せり人は、最初の値段はどのように言っていましたか。」 T:「せり人の言う値段は、どうなっていましたか。」 ・ 生徒の反応から、理解が困難なようなので、せりの場面のVTRをもう一度見させ、せり人と仲買人の様子に注目させる。	C⊕:「せり人と仲買人です。」 R夫:「安い値段から言っていたと思います。」 R夫:「高くなっていきました。」 M夫:「たしか、高くなっていったと思います。」
	生徒の発表をもとにして、一番高い値段をつけた仲買人に、せり落とされることをまとめる。	N夫、S子は、理解が困難なので、VTRを通して説明する。
4. 仲買人に引き取られた農産物は、どこへもっていくか発表する。	T:「せり落とされた農産物は、どこにもっていきますか。」	N夫: } M子: } 「八百屋さんです。」 R夫:「スーパーです。」
5. せり落とされた値段と店頭の値段とではどちらが高いか考える。	T:「市場での値段と店での値段とでは、どちらが高いかな。」 ・ 店頭(小売値)は、どうして値段が高くなるか考えさせる。	C⊕:「店の方が高いです。」 N夫、M助、M子:「店のもうけ分です。」 R夫:「それに店まで運ぶ運賃が入っています。」
6. まとめをする。	・ 流通の過程を書いたカードをその流れにそって、順次、全員に読ませる。	

⑤ 学習後の生徒の変容

以上、「農産物の流通」について指導してきたが、生徒たちがどのように変容したか述べることにしたい。

宿泊農園作業の時に市場の様子を見学しているが、そのしくみについては余り知らなかった。生徒たちが市場の様子のVTRを見て、せり人と仲買人の働きを再確認したり、そのしくみについて学習を重ねることで、市場の大まかなしくみを理解することができるようになった。

また、市場で働く人々の仕事の厳しさも知り、ふり返って自分たちにあてはめて、各自が分担している仕事や作業に、更に一生懸命にまじめに取り組もうとする態度がみられた。

さらに、農産物が高く売れるためには、傷がついていないこと、大きさ（粒）がそろっていること等が必要であることを学んだことから、農園作業では、以前にもまして農産物を大切に扱い育てようとする態度が見られだした。例えば、10月のさつまいもの収穫では、いもが植えである回りの土から取り除き、軍手をつけていねいにいもをとっていたし、いもの砂を落とす時も同様であった。大、中、小に選別する作業も真剣に取り組んでいた。11月の大根の収穫でも、葉をもたずに根元の方をもって抜き、洗った大根を日干しにする時にも両手を使ってやるなど、著しい変化が見られた。

⑥ 問題点

- ・ 農産物を例として、その流通過程の大まかなしくみを学習してきた。彼らの身の回りにはあらゆる商品が出回っているが、それらの商品も農産物とほぼ同様な流通経路を経て、彼らの手元に入ることは大体理解できた。ただ、ここでは大まかなしくみしか学習していないので、実際の流通過程では、さまざまな伝票やお金の動き等があることを、今後とも機会あるごとに指導していきたい。
- ・ 農産物の流通過程を通して、さまざまな場所でそれを取り扱う人々が一生懸命に働いていることに触れてきた。このことは、この3月に卒業し、社会人になる本クラスの生徒にとって大変有意義であったと思う。これを契機として、今後とも真剣に働く態度を身につけていきたいと思う。
- ・ 農産物が高く売れるのは、傷がつかない、つやがあり大きさ（粒）もそろっている物であることを学習してきた。この事をふまえて、ふだんの農作業を一生懸命にやり、収穫の時にはいねいに扱い、処理することが必要である事が十分理解できたと思う。更に本単元の学習展開を工夫することによって、一層農作業への自覚を高めたい。
- ・ 本単元は、全学年とも5月ごろに実施した方が適当であると思う。丁度、そのころが、そら豆やえんどう豆の収穫の時期でもあり、6月には、農産物の出荷と市場の見学へと学習が発展していくからである。

3、校内宿泊農園作業

(1) 高等部における宿泊学習のねらい

本年度高等部では、次のような宿泊学習を実施した。

名 前	対象	場 所	目 的
① 宿泊学習 (4/22~4/23)	1年	学 校 内	○身辺自立及び集団生活への適応の実態を把握する。 ○生徒と担任相互の親睦を深める。
② 臨海学校 (7/21~7/22)	全体	諸寄臨海教室 (公共施設)	○水に対する安全の技能・態度を養う。 ○公共施設の利用により自律的な生活態度を養う。 ○集団活動を通して、好ましい人間関係を育てる。
③ 船上山宿泊学習 (10/28-10/30)	全体	船上山少年自然の家 (公共施設)	○船上山の自然や史跡に親しませ、情操を養う。 ○公共施設を利用し、集団生活を通して、自主的に規律正しい生活態度を養う。
④ 校内宿泊農園 作業 (6/2~6/4)	全体	学 校 内	○農園作業を通して土に親しませ、作物を植えて育てる苦勞と喜びを体験させる。
⑤ 校内宿泊職業 実習(12/2~12/5)	全体	学 校 内	○被服・陶芸・印刷とコース別に終日作業をさせ、勤勞態度や作業技能の向上を図る。 ○自律心や協調性のかん養を図る。

上記の表からもわかるように、高等部における宿泊学習のねらいは、大きく次の2点にまとめることができる。

① 自律性、社会性を強化する。

宿泊学習の形態は、学年単独で実施した一例を除き、学部合同ないし縦割りの編成で行っている。それは、生活経験や種々の能力に差のある者で構成する集団である。生徒同志がつくる集団の中では、個々の甘えやわがままが許されないことを、生徒は肌で感じとる。また、経験ある者が未経験なる者を助け、互いに助け合い協力しなければ生活が成り立っていかないことを具体的な活動を通して次第に理解していく。

こうして、さまざまな活動内容を盛り込んだ学習を繰り返すことにより、好ましい形で集団参加ができる力を定着させていこうとするものである。またそれは、小学部・中学部における指導の確立をめざしているということもできる。

② 職業的自立をめざす。

将来職業人として自立するために職業の基礎的な知識・技能を習得し、勤勞態度を育成することが、高等部の目標である。上記の表のうち④と⑤は、この目標に真正面から取り組んだもので、高等部特有の宿泊学習といえよう。

職業人として自立するための態度づくりや知識・技能を育成することが、日常生活全般を通して行われていることは、今さらいうまでもない。しかし、日常生活の中では学習させることの困難な早朝の公設市場見学、終日作業就労等を体験させることを通して、より確実に目標に迫ろうとするものである。

を参考にして決めているが、市場価格をまず理解し、それを参考にしながら自分たちが収穫した作物のでき高に見合った価格をつけるというのは、難易度の高い学習である。従ってこの学習には、比較的能力の高い半数の生徒しか積極的に参加することができない。

- かつて農産物を市場へ出荷した経験がない上、社会見学の一環としての市場見学もしていない。従って市場出荷、市場見学共に初めての学習である。しかし、公設市場の内部の様子やせりをしている場面、出荷された野菜が仲買人に買われていくまでの過程については、VTRの視聴を通してある程度の理解をしている。

宿泊学習に伴う事前学習の中で、「鳥取協同青果市場とはどんなところか」との問いに、次のように答えている。

- 農家の人が野菜を作って出す。…………… 13（14名中）以下、名等略す。
 - 野菜をせりにかける。…………… 10（14）
 - 手のサインを出し合って買う。…………… 7（14）
 - 売れない野菜をもう一度せりにかける。…………… 2（14）
 - 朝5時半にはじまって8時で終わる。…………… 4（14）
- 農産物の流通については、主として社会科で指導することになっている。しかし、この度の市場見学に先立ってそれを取り扱うことはしておらず、いわゆる農産物の流通についての知識はない。

④ 公設市場の見学



VTR視聴を通して、公設市場内部の様子をひとつうり知っているとはいうものの、やはり本物の迫力にはとうてい及ばない。広い建物いっぱい、所せましと並べられている青果、せり人の威勢のいいかけ声、仲買人の真剣なまなざし……早朝の寒さも手伝って、皆が緊張の面持であった。

まず専務さんが、次のようなことがらについて説明して下さった。

- せり値は、中央市況を参考にして決める。
- 青果の流通のしかたには、いろいろな型がある。
- 仲買人は2種類あり、帽子で分けている。
- 近郊の農家のみならず、他県から出荷されるものもある。

といった内容についての説明であった。



いよいよ出荷したさやえんどう豆とそら豆のせりが始まる。積み上げられている何箱もの豆

が、せりによってひとつひとつ片づけられていく。質的にさほど差のないように見えるものが粒の不ぞろいや傷ものがまざっているために、容赦なくたたかれていく。見るからに粒が小さく傷ものもまざっている一箱が、特別に安くせりおとされたのを、生徒は目の前で見たのである。



一方、特に念入りに選別と箱づめをし、計量も、定量より多い目にして出荷した附養農園出荷の豆は、高い値でせりおとされた。

学校へ向かうタクシーの車中では、高値で売れた喜びと、専務さんがごちそうして下さった熱いコーヒーのおいしかったことが、専らの話題であった。

(3) 問題点

① 市場見学から一週間後、全員が公設市場の専務さんに礼状を書いた。一人ひとりにより文面に差があるのは当然であるが、多く取り上げられている事項は、次に記すものである。

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| ㊦ 野菜がたくさんあって驚いたこと。 | ㊩ 大勢の人が働いておられたこと。 |
| ㊧ 仲買人とせり人の真剣なかけ合い。 | ㊪ 出荷した野菜が売れてよかったこと。 |
| ㊨ 仲買人の帽子に2種類あったこと。 | ㊫ 早朝から働いておられて驚いたこと。 |
| ㊬ 熱いコーヒーがとてもおいしかったこと。 | 等 |

これだけで全生徒の学習実態を考察することはできないが、㊦や㊨から、「働く」ことに対して視野を広げている生徒がいることがわかる。また㊩からは、市場見学の目的をしっかりと理解し、農園作業を自分のものとしている生徒がいることが、さらに㊬からは、人から受けた親切に感謝の心を持つ生徒がいることがわかる。市場見学が単に見学で終わっている生徒がいる事実は否めないが、少なくとも、明らかに有効な学習の場となっている生徒がいることも事実である。今後とも、市場出荷を恒例化することにより、全生徒の学習の深まりを期したいと念ずる。

② 農産物をていねいに扱わねば商品価値が下がることを、特に下位に属する生徒が学習したのは収穫であった。さやを途中で折る。(M夫)。遠方のかごに投げ入れる。(S子)。縦横に絡んだ茎を踏んで歩く。(S美)。もぎとっていい豆かどうか考えることをせず、手あたり次第にとる。(A子、Y夫、H夫)。こうした実態を改善しようとする態度が見られだしたのである。

また、この市場見学をきっかけとして、何をしてもぐずぐずして人を待たせることの多かったN子に、早くとりかからねばならないという意識が芽生えたこと。さつまいもの収穫期には薄い皮を少しもはがさまいと、全員が慎重であったこと。大根の収穫期には、冷たい水で洗う仕事に女子全員が黙々と取り組み、決して愚痴を言わなかったこと。等、勤労態度を育成することに、市場見学が大きな役割を果たしていると思われる例を、いくつも挙げるができる。

③ しかし、公設市場への出荷が一度しかできなかったこと、また平常の農園作業が、わずかに週2時間という時間設定の中で行われていることのため、少しでも商品価値の高い作物を栽培しようとする意識を高めることができなかった。今回の公設市場出荷が、生徒にとって一つの体験で終わってしまってはならない。より確かな勤労態度を育成するための、一つのステップとならねばならないと考えるものである。

〈公設市場の専務さんにあてた礼状〉

朝早くから働いて、ごくろうさまでした。
ぼくは市場を初めてみました。いろいろな野菜がおいてありました。せんむさんからいろいろな話をききました。ぼくたちが出したそら豆は、1キロが400円でした。2箱で3000円くらいでした。

せんむさんのあんないで、コーヒーをのみました。熱いコーヒーなので、ゆっくりとのみました。とてもおいしかったです。

せんむさんがたも、これからいっしょうけんめいがんばって下さい。

さようなら。 (M助)

いちばへいきました。

そらまめをうりました。

えんどうまめをうりました。

こーひーをのみました。

おじさんにもらいました。

じゅうすをもらいました。 (S美)

いちばへせりを見にいきました。さやえんどうとそらまめをうりました。コーヒーが、とてもおいしかったです。ジュースをありがとうございました。おいしくいただきました。

学校で、べんきょうにがんばっています。おじさんも、げんきではたらいってください。びょうきをしないでください。また、私たちが作ったやさいをうってください。 (S子)

朝の5時ごろに、鳥取協同青果市場へ行きました。

僕達が、公設市場へ来た時間よりもっと早く来られていたので、びっくりしました。5時半ごろから、仲がい人がせり人の回りに集まって、仲がい人が手でサインをして、何円と言いながらせり人に言っていました。帽子をかぶって、いっしょうけんめいに、せり人と仲がい人が言い合っていて決めていました。仲がい人のかぶっている帽子についているふだの色が違うのは、魚と野菜を買う印と野菜だけ買う印を色でくべつてあるということです。ぼくは、ふだの番号は人の名前のかわりなんだなあと思いました。

コーヒーを飲みながら、専務さんの話を聞きました。

とてもいい見学になりました。どうもありがとうございました。これからも、元気で仕事にがんばってやってください。

さようなら

(R夫)

4 考察と今後の問題点

養護学校の義務制以降、養護学校における児童・生徒の障害の重度化・多様化が進んできた。これは当然のことわりであり、我々は進んでこの状況を引き受けるべきであろう。この観点から作業学習を考えると、農耕・園芸のもつ意義は大であると思う。単純・素朴で、まさに「地」についた学習が可能だからである。昨年度、本校高等部は「作業学習におけるつまづきをどのように指導したか」― 木工（男子）トロ箱の製作を通して ― をテーマに発表した。その時、ある附属養護学校の先生は、「おたくの生徒は優秀だ。うちの生徒はかなづちも持てない。」と発言された。正確には、金づちは握れても、釘の頭をめがけて正しく降り下ろせない、ということだろう。本校高等部にも、目と手の協応動作に著しい欠陥をもつ生徒はいる。（いや、それゆえにこそ、昨年は、どのような指導法で、釘を打つことを指導したか、を提示したわけだが。）しかし、その先生の指摘はまた当を得ており、そのような作業学習が当該生徒にとってほとんど意味を有しない場合があり、本校でも児童・生徒個々の障害の程度や能力・適性を思う時、その種の感が強い。印刷はもとより、木工コースも廃止するか、あるいは作業内容を大幅に変更するかが余ぎなくされる事態は十分に予想される。

我々はその時、農耕・園芸のもつ役割の大きさに注目するのである。農薬を調合し散布する、耕運機等、農器具を使用するといった高度な学習があるかと思うと、石ころを拾う・雑草を取る水をやる・芋を掘るといった比較的単純な作業もある。どの生徒も、どこかの場面で、これらの作業に参加できるし、指導の工夫によって上手に根から草を抜くことも、適量に水をやることも作物を傷つけないで掘ることもできる。我々はこのようにして、それがたとえ小さな進歩であっても技能を高め、こつこつと作業に取り組む忍耐強い態度を育てることができると確信しているのである。そして何よりも、ものを作ることの喜びを肌で感じとらせ、意欲づけを行うのに恰好の作業学習と考えるのである。以上、農耕・園芸との取り組みを肯定的側面から力説したわけであるが、ひるがえって本校の研究とのかかわりを反省する時、いくつかの問題点があげられる。

まず、農耕・園芸を中心とした他教科・領域との構造化が不十分であったこと。また、ある教科が農耕・園芸にアプローチする単元を組んだ場合、その単元が学年によってどのように系統化されているかが不鮮明であったこと、評価表を十分に生かすきれなかったこと等があげられる。今後以上の諸点を反省し、再点検することによって、一歩でも本学習が生徒の自立へ近づくよう期したいと思う。